

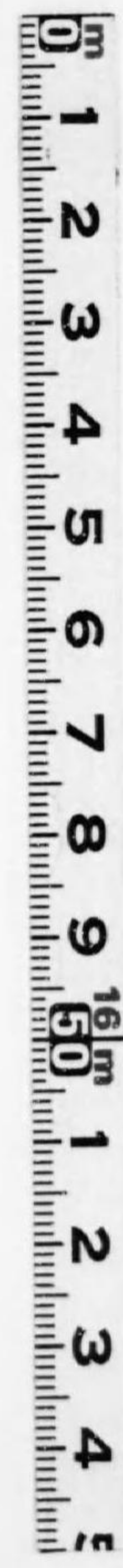
特116

54!

乞御高覽

講
習
錄

東京市牛込區市ヶ谷臺町十六
大學林講習部



始



98116
541



哲學要覽

序言

第一章 哲學の總義

哲學の字義

哲學の定義

科學と哲學の限畧

哲學の種別

第二章 印度哲學

(一) 弥曼婆學派

(二) 尼夜耶學派

(三) 衛生師如學派

(四) 僧法學派

— — — — —
0 0 九 九 八 三 二 二 一

大正
14.4.20
内父

(五) 吠陀學派

(六) 瑜珈學派

第三章 支那哲學

儒家學派

(一) 子思の學說

(二) 孟軻の學說

(三) 荀子の學說

道家學派

(一) 列子の學說

(二) 莊子の學說

(三) 楊子の學說

(四) 墨子の學說

一

一

二

二

二

三

三

三

四

四

四

五

(五) 韓愈の學說

(六) 王陽明の學說

第四章 西洋哲學

タレース

ピタゴラス

ヘラクリタス

デモクリタス

ソクラテース

プラトーン

アリストートル

ストア

エキステラス

デカルト

スピノーザ

ライブニツク

ロツク

五

五

六

七

七

八

八

九

九

一

二

二

三

三

四

四

第五章 近代哲学

一五

- 一、 近世哲学に於ける哲学者殊にカントの地位 一五
- 二、 近世哲学思潮に於ける人間性の強調 三〇

カントの批判哲学

三四

シヨウペンハウエルンの歴史哲学

三八

ニイチエの超人哲学

四一

スペンサーの不可知論

四八

マルクスの唯物史観

五〇

コムトの実証哲学

四七

トルストイの人道主義

五四

タゴールの再生哲学

五九

哲学要覧

(哲学二千年史改訂)

序言

一、 本書は前回の講習録哲学二十年史中の翠を抜き講習者をして最も余り易き様
 要覽的に編録したものである。既に諸氏の大方は哲学に對する充分なる設備
 智識を有たれて居る様であるが中には一般読者の哲學智識を故がれて居る
 らしい向も其提論論文上に於て時々見受けられる所であるから茲に殊更本要覽を
 提釋して此か總括的智識に對する御参考に供せんとした次第である。

一、 本篇は要覽的な極めて簡潔なる記述ではあるが其神髓とする處は出来得る限
 り要領を得るやうに努めた計りであるが諸氏は大概之に依て河漢の哲學、
 河氏の哲學はどんなものかと云ふだけはお余りにならざる筈である。

一、 本篇の編纂は出来得る限り其学派其人物を主本に哲學正史上に現れたる年代
 別の順序に依り編録する事にした。蓋し哲學に對する深刻なる一般智識の概
 念を喚へる上に於ては此の記述形式の方がよからうかとの危察心からである。

第一章 哲學總義

(一)

哲學の字義。 哲學とは英語のフィロソフィト希臘語のアイリソフアラニ語

から出たもので之は智を愛するものと云ふ意味に當り。

哲學の定義。 哲學とは宇宙萬物並に人生の根本原理を研究する學問である。

科學と哲學の限界。 科學とは宇宙萬物の現象に就いて研究する學問で、物

理學、化學、動物學、植物學、礦物學、地理學、地文學、天文學並に心理學等

の一切を總稱する。 それで科學に於ては必ず次の三事實の範圍を觀する事は出

來ない。

(1) 物は客觀的に存在する事

(2) 因果の理法の普遍なる事

(3) 現象間の關係を定むる自然法の確實なる事

之はハツクスレー氏ハ物理學の立脚點であるが科學の研究も此處迄が限界であ

つて決して是以上に研究の地歩を進めないものである。

一例を擧ぐれば此の Copp には水がある、此水は何から出來て居るかを尋ねると、

それは酸素と云ふ元素と水素と云ふ元素の化合から出來て居ると答へる。然らば其水素は何から出來て居るかを再び尋ねるとエレクトロニと云ふ極微粒子一千個から構成されて居ると答へる。然らば其のエレクトロニは何から出來て居るか、どんな性質を有つて居るものであるかと三度尋ねると最早説明に窮する。假し最早一言の答へを出す事が出來ない。然らば吾人は彌加^{ミカ}上にも向上したいと云ふ心を有つて居る。それで此の科學に於ては到底説明する事の出來ぬ究極的原理をも攻究して見たいと方める。即ち皮膚な現象知識だけに止まらず一切の電極をも獲得の様と方める。之が眞實の意味に於ける哲學の起源であつて哲學の眞價は茲に存する。

即ち哲學とは彼れ科學が宇宙萬物の現象だけに限極された研究に甘んじて居るのに対して我は徹底たつて宇宙萬物の究極原理をも獲得決定しやうとする學である。彼科學が相對的研究地歩に止まつて居るのに対して我哲學は絕對的態度を採らんとする諸學の最高最上位の學科である。

哲學の種別。前に述べた様に哲學とは宇宙の根本原理即ち宇宙萬物の由つて來る所の大原因は何であるか、物の主眼とは何であるか心の本質とは何であるか、

(三)

神(辭)とは眞實に存在するものであるか、否や等些か架空的(かく)な大問題を研究仕様とする學問であらう其(その)人々の直観、又は止脚地等の差異に依つて之が研究の方法や説明の方法が色々に違ふ、そして此處から色々な哲學上の論議が生れる、私は先ず此宇宙を研究するに便宜上次の二大別にして述べよう。

- (1) 智識論
- (2) 純理論

紙理論は又分れて本體論、宇宙論、神學論の三となる。

本體論。とは物と心との本體を研究の主眼に置くもので

宇宙論。とは宇宙は如何なるものであるかを研究の主眼に置くもの

神學論。とは宇宙の最高最上の存在物とは何であるかを研究の主眼とする學

派である、尚實踐に屬する哲學がある之を倫理學と云ふ

宇宙論と分派。尚前記宇宙論は又分れて次の三派を成して居る

- (1) 唯物論
- (2) 唯心論
- (3) 二元論

唯物論。とは宇宙は悉く物質から成り立つて居ると主張する派で物を以て心の純粹なるもの、物と心とは元來差別の無いものと説く學派である。

唯心論。とは宇宙の根元は心であつて一切現象は心から成り立つて居ると主張する學派である。

二元論。は又分れて二派と有り、一つを對立的二元論と云ひ他を包含的(包含)二元論と云ふ。

對立的二元論。とは宇宙は物と心との二元から成り、物は物として存在し、

心は心として存在すると主張する論議である。

包含的二元論。とは對立的二元論者の謂(いはゆる)所、物は物として存在し心は心として存在すると云ふ説に賛同せず、物と心とは其根元は於て同一不二の實體の中に包含されて居るもので一にして二、二にして一のものであると主張する論議

である。

心と物との關係は一にして二、二にして一と云ふ意味に於て二元論は一元論に變化する、即ち物と心との合致は其(その)處に幽玄なる究極的本體を醸成すると、尚此の究極的本體に対する見解は又分れて有神論と无神論との二つとなる。

有神論。とは凡べて此宇宙以外、換言すれば吾人の見聞する現象界以外に究極的本体即ち神なるものがあると主張する論派で
汎神論。とは宇宙の究極的本体を宇宙現象其まゝ、の中に置き現象一切を直に本体の権化と説くもので併教の一切衆生、悉有佛性（一切のもの悉く佛（神）の性を有つて居る意）等は此派に属する。
知識論。とは人間の智識は眞実に宇宙の根本原理を闡明し得るものであるかどうかを研究の支眼とするものである。蓋し此の智識論中にも種々の異説がある。例へばカントの如きは智識は経験に依つて得るものであるから経験以外のものに就いては確乎たる認識を得る事は出来ぬと云ひ、又ハイゲルの如きは一理は以て萬象を推知し得る、人の智識力は斯の如き制限のあるものでけ無くして経験以外にも及び得るものであると論じて居る、蓋し所論区々として今尚定まる所が無いやうであるが、今稍定説とするに足るものを挙げて見れば『智識は其性質から云ふと純粹に主観的のものでは無く、客観的の真理を我が心に取り入水て初めて主観的となすものであるから現象的客観以外である處の眞象には到達する事は出来ぬ、蓋し此客観的の中に主観的の眞象を討究し得らるゝか、どう

かと言ふ事は今尚研究中である。

『解』

客観とは自己以外の他物、又は意識の目的物、即ち主たるもの、対象で自己又は意識に観察せらるゝ、一切の外物、即ち主たるものの目的物となりて研究せられ、観察せられ、経験せらるるものを云ふ例へば自己に對して外界の事物は悉く客観である、但し精神に對すれば自己の身体も客観となる。
主観とは知覚し思考し、感動する心其物を云ふ但し自己の意識慾望等も自我の考察の対象となる時は客観となる

(備考)

宇宙觀の二派。

(一)機械論。宇宙の活動するのは時計の動くやうなもので其間に意識等を有するものではない即ち機械的であると主張する論派である
(二)究竟的本意識論。此派の主張は宇宙は究竟的本意の下に活動するも

のである、但し宇宙の有って居る意思是吾人の有って居る様な相對的な意思では無く絶對的の意思で之を名づけて超意識と云ふ即ち宇宙は吾人の有って居る様な相對的意識を以ては到底意識する事の出來ぬ意識を以て活動して居るのであると。以上二說中現今の哲学界に於ては機械論よりも究竟的本意識の方が有力である。絶對的。とは他に制限せらる、事なき事、又は物に比較する必要なき事。相對的。相對なるに云ふ語、比較して見ればの義、制限ある語。

第二章 印度哲學

印度哲学の源起は婆羅門教の經典韋陀教成立後數百年同經の哲理に立却して生起したプラナマス学流を以て嚆矢とする。元來印度は哲学思想の一大中樞で細別すれば佛教以外九十六種の学流があると云はれて居るが左には此の六大学流の要領だけ紹介する。

一 弥曼婆学流。本流の始祖はジャイミユと云ふ紀元前世紀の人である、韋陀教を以て最上の聖義と奉じ人は韋陀經の儀式に依つて初めて解脱し韋陀を暗誦して口々に相傳ふる声は常住不滅であると説く学流

二 尼夜耶学流。開祖はゴータマト云ふ人亦一名目足道人とも云ふ。

此流の特色は論理学即因を明かにするにある。例へば

宗。聲は無常なり

因。所作性なるが故に

喩。譬へば瓶等の如し

合。瓶に所作あり瓶は是れ無常也声に所作あり声は是れ無常なり

結。是故に知る声は無常なりと

斯の如く五分作用を立て、十六諦（智討論）九問、因、十四過類（形式論理）を説いて居る。

三、衛生師迦學派。

又勝論とも云ふ始祖は加那陀、六句義を立て、

一切を論じて居る

(1) 実。一切萬有の実躰、地、水、火、風、空、時方、我意の九つよりなると云ふ。

(2) 徳。この實體に附屬する性質で十七種又は廿四種に分けて居る。

(3) 業。萬物諸種の運用であつて此業に三つある前の實は躰で徳は附で此三つで宇宙萬象を悉く網羅すると云ふ。

(4) 同。一切萬有各自の特性であつて実徳業の三を差別してゐる。

(5) 異。一切萬有各自の存在性であつて実徳業の三を合して大有として居る。

(6) 和。萬有の相附著する性であつて実徳業の三を和合するものである。

尚本派の論者は現象界は微細なる原子の活動であつて之を離れて實は無いと説いて居るが之は誠に現代科学から觀ても正しい言葉である。

四、僧伽學派。始祖は迦毘羅で時代は衛生師學派と同時代、此派の論

者は宇宙を分析して神我と自性との二つに分ち此二元を以て大宇宙の一切を説明して居る、神我とは他を生ぜず他にも生ぜられざるもので、自性とは他を生ずるも他に生ぜられざるものを云ふ、此自性より覺を生じ覺より慢を生じ慢より五唯五大を生じ五大十一根を生じ是等の生ぜられたるものは無常のものであつて生ぜられざる自性と神我とは常住である此の常住である所の神我と自性とを合せて萬物は成立するのであると

五、吠陀闡學派。本學派は獨創的な説を立てず韋陀經典の教へ特にウバニシヤットの思想を継ぎ韋陀の精神を大成した梵天を以て宇宙第一の原因原理とし現象界は此顯現に過ぎないものと説く

六、瑜伽學派。始祖はバタンジャリ一佛教より少し後れて現はる、

瑜伽とは内心相^應義で、沈思冥想して思想を集注統一し最上神である所の自在神と合一するのを目的とし此目的を達せんがため耐持、勤勞

容止、壓息、禁忌、禪定、三昧の大法を行ひ、此八徳を修行すれば解脱を得ると説く学派である。

第三章 支那哲學

支那は古來幾多の思想家を排出しては居るが彼、特出のものとして儒家学派、道家学派の二つであらう。

儒家学派。本学派は魯の聖人孔子の祖述する處で、之を以て支那思想の主本と云ふも過言で無い程の親がある、而して儒家の所説は空理空論を避けて躬行実践を重んずるにある、例へば「君子は言に訥にして行に敏なり」と言ふが如きである、子思、孟軻、荀子、等は共に本学派の流れを汲むものである。

子思の学説。喜怒哀樂は未だ發せざる之を中と謂ひ發して節に當る和と謂ふ、中は天下の大本なり、和は天下の達道なり等と云ふ類、

(二) 孟軻の学説。

人には四端あり、(一)惻隱の心は仁の端なり、(二)羞惡の心は義の端なり、(三)辭讓の心は礼の端なり、(四)是非の心は智の端なり。自ら能はずと云ふは自ら賊するものなり、人には皆仁、義、礼、智の四徳が先天的に備はつて居ると説く人の学ばざる所にして能くするは良能なり、慮からずして知るものは良知なり等亦同し、蓋し此良知良能説は支那哲學としての大岐題、骨説となつて居る。

(三) 荀子の学説。

前孟軻即ち孟子の性善説に反對して性惡説を高唱した其善は偽也人、生れて利を好み、嫉惡あり耳目の慾ありと、又子は當時の学者が忘りに天道を説くにも反對し非難して居る。

道家学派。

始祖は老子、道家は儒家が実践道徳を力説し現象界にのみ注目して居るのに反して無名を以て宇宙の本體とし有名を以て現象の初めとして居る、今此道徳説の要點を示せば「聖を絶し智を棄つれば民利百倍せん、仁を絶ち義を棄つれば民存慈に復せん、巧を

絶ち利を棄つれば盜賊あるなし』等。如くて實に儒家の正反對とも云ふべき學派である。

列子、莊子、揚子、墨子は皆此派の繼承者である。

(一) 列子の學說。老子の旨を繼承して虚無恬淡を主義とし諸國道德の差異ある事を云ひて、善悪は一定したもので無い社會の多岐敷を以て行はるものであると、而して子の思想は死を以て穴窮極とし『大なるかな死や君子息む、小人伏す、善なる哉、古の死あるや、仁者息む、不仁者伏す』等寂滅の態を以て理想として居る。

(二) 莊子の學說。子も亦列子と同じく死を理想として居る、『死とは上に君なく下に臣なく、又四時の車無し、徒然として天地を以て春秋とし南面王の樂しみも遂に過ぐる能はず』と孔子を罵り先聖を嘲り仁義は我心を亂ると主張した。

(三) 揚子の學說。揚子は道家に基づくも老、莊の様に無爲退隱を唱へ

ず快樂主義を唱へて快樂を満足せしむるを人生の要義とした。

(四) 墨子の學說。墨子は揚子のやうに自利を説かず他利を旨とした兼愛功利説を高唱した。天は必ず人々相愛し相利す事を欲し人々相惡み相賊する事を欲せず。と

以上、は支那古代に属する哲学である。中世には揚雄、韓愈出て近世には周茂、叔二、程子、朱子、陸象山、王陽明等が出てゐる。(畧す)韓愈の學說。名は退之。自ら孟子の説を継ぐと云ひ、性と情とを區別し性には三品あり情には七種ありと説き而して性は生と俱に生ずるもので情は物に接して生ずるものであると、尚性の三品とは上中下の三を指し情の七種とは喜怒哀樂愛惡慾の七つである、又彼は性善論情悪説を唱へた。

王陽明の學說。名は守仁、紀元一四七二年に生れ陸象山の心理説を繼承して『心は即ち理なり、天下又心外の事心外の理ありんや、其

物理は我が心に外ならず、吾心を外にして物理を求むれば物理なし、物理を遺して我心を求むれば我心なし、心の軀は性なり、性は理なり、心は一身に主なりと雖も実に天下の理を管す、理は萬年に散在すと雖も實に一人の心に外ならず」と云ふ様な説を高潮した、又静座の法を教へて静座の如き修行を主張し前記の如き心即ち理の説に改ゆるに、知行合一論を以てした。

知は是れ行の始め、行は是れ知の成、若し会得する時は一個の知を説く已に自ら行の在るあり、又一個の行を説く、已に自ら知の在るあり、已に之を行へば可なり、行はずんば將に知れるに非ず」と等類陽明に至って支那哲学も大に大成したと云ふべきである。

第四章 西洋哲学

本章では特に学友を挙げず専ら人物本位により時代順に配列紹介する

事にしたタレリス。を以て西洋哲学の元祖とする、僧院の中に閉塞され、宗教に繫縛せられ更に魔術、占星術、錬金術の如き妖術に昏迷されて居た宇宙観は茲に少しく解放され真正の人間の理智は彼の手に依って漸く其の真の光を放ち始めた。彼は宇宙の本軀を水であると主張した、此の主張は聊か當らざるの観はあるが、宇宙の本軀を宗教の中に求むる外、何事も知らなかつた當代、これ以外の物を以て宇宙の本軀天地の大原因を説き出した功は實に偉大であると云はねばならぬピタゴラス。は宇宙萬有の起源を数に出つると主張した。凡そ一致和合は宇宙の本質である、人間道徳も一致和合を以て基とする、一致和合の根元は秩序であつて数は又秩序の始源である、此意味に於て数は萬物の本軀で萬有は奇、偶、二数の調和より成つて居ると。又氏は靈魂輪廻説を主張し、靈魂が人の身体に存するのは前世に於て罪惡を犯した爲に今世に其果を受けて肉体と云ふ獄舎の中に其靈魂を投

られたのである、尚現世の所業は又未來に於て其賞罰を受くるから品行を謹しまねばならぬと。

ヘラクリタス。タレーヌが水を以て宇宙の本體としたのに對して氏は火を以て宇宙の本體であると唱道した。宇宙間一物として變ぜないものは無い、變化は實に宇宙の一大原則である、而して萬物中尤も變化の多いものは火で、火は宇宙の本體である、萬物の父母である。此火より分れて萬象となり萬象の終局は其火に還没するのである、とデモクリタス。氏は唯物論者で分子説を大成した、即ち天地萬有は悉く原子と虚空とから成り吾人の肉體も精神も皆原子から成立して居る、但し精神を組織する原子は肉體を組織する原子よりも優つたものであると而して原子とは永遠より永遠に存する極めて微細な吾人の肉眼では到底見る事の出来ぬものであると。

尚氏の倫理説は快樂主義で善惡正邪を苦樂から判断して居る。

ソクラテース。は希臘哲学史、中興の偉人である、古代哲学は實に彼の手に依つて大成したと云ふも過言で無い感がある。彼は道德の傳ぶべきを説いた而して眞の道德は知識が無ければ之を修する事が出来ぬと一種の知行合一論を主張した、氏は日々市中を徘徊して市民を教授し人々に向つて説話するのを無上の快樂とした、而して氏の説話法は自分は何も知らぬ者のやうに糺ひ、人の知つて居ると思ふ事を種々に質問し、終に其人の智識に前後矛盾を來さしめ自ら其無智なる事を悟らしめる様な方法をとつた。是れソクラテースアイロニー即ちソクラテース的及語と稱するもので彼は之に由りて其智識を知らしめ自己は聽者となりて不明瞭、不判断の中から新知識を出さしめた、氏の論を以て歸納法の始源とする。

プラトーン。ソクラテースの説を開展し、前代の哲学を調和拆衷して系統を組織した、而して氏の所説は觀念論、理想論、人生觀、政

治論等の各種に及んで居る。

二。

觀念論。吾人は吾人の経験する所のものから経験以外のもの、實在を認め、之に依つて吾人の経験に基く知識を説明する事が出来る。理想論。眞実の体は觀念だけの様である、然し一方を見れば尚吾人の感覚し得りる、現象界がある、此の現象界は如何して存在するものでありうかと云ふに眞実体である所の觀念（即ち神）の作ったものである而して神が直接造つたもので無く之が媒介の下に創造したものを在界的精霊と云ふ。吾人の心は此の在界的精霊の一部分である、此意味に於て觀念の本體は神であると。此現象と觀念（理想界）との關係は氏哲学中の困難点である。

人生觀。吾人の精神は觀念^{アイデア}の部分であるけれども肉身と云ふ牢獄に繋縛せられて自由の天地に通行を許され無い、それで吾人は肉身によつて生ずる下等の情慾を制して觀念本來の性質を養ひ眞実体を復歸せ

ねばならぬ、目前の世界は現象である、觀念の在界は理想である此理想の實現に力むるはエロオス即ち大善に接近する所であると氏は又心を理性、氣力、肉情の三つに分ち理性は智、氣力は勇、肉情は節制とし此三つを程良く修行するのが人類の本分であると

政治論。國民の目的は正義にある、而して觀念を實行する第一として國家を萬能なる者として一切の人間社會を其下に説明した、國家を人心の如く理性を治者に配して天下の人心を善に向はしめ、氣力を勇士に配して外敵を防ぐ勇を鼓舞し肉情を庶民に配して節制を務めしめ此三者を相調和して正義の目的を達する事が國民の本分であると

アリストートル。氏の所説は理論学、実践学、構造学等の各種に及んで居るが左には此の主要なる点のみ紹介する。

形質論。形と質とは全然別個のもので形、質各別に存在する時は終始變化の無いものである、物に生滅變化のあるのは此の形、質が合致

二一

して一体をなして居るものであるからである、而して此の形と質とは決して相離れて存在するもので無く「形無ければ質無く質なければ形無し」是天地の真相であると。

倫論学。人類生存の目的は善を行ふにある、善は是れ幸福の始源であるとし氏は此の幸福を徳と名づけた。

政治論。吾人は天性政治的動物であると
ストア。氏は火を以て宇宙の本体とし、凝って物質となり解けて火となり是は実に循環極まりなきものであると、但し此の火は單に物質

的なもので無く靈活なる理性を有するものであると。
エヒキユラス。氏は曰ふ。実践道徳に関せぬ講究は如何知識を増進する科学であつても一切無益であると。而して吾人人類の大善は快

樂にある快樂は吾人の常に欲する所であつて此在に處する第一の目的も又此の快樂に外ならぬ、但し此の快樂には精神上の快樂と肉体上の

快樂とがある肉体上の快樂は瞬間的のものであつて精神上の快樂は永久的のものである、尚此快樂は消極的快樂即ち苦を免る、方面と積極的快樂即ち善を積む方面との二方面から見ると事が出来るが、氏は消極的快樂を先にすべきものと説いて居る。

デカルト。氏は疑ひを以て哲学の基礎とし一切萬有悉くを疑ひであると觀、唯其中に我の存在だけは疑ひ無きものと説き始めた、即ち我思ふ故に我在りとの格言を發して先づ身体と精神との存在を確立し而して此二つの存在は自ら存在したもので無く、宇宙の根柢たる或る本体の力に依つて造り出されたものである事は亦疑ふべき餘地が無い、吾人は此本体を名づけて神と云ふ神は神聖であつて無限の責任の實在である、此の神より心と物との二つは派出生されたものであると、即ち氏の説は二元論である。

スピノーサ。は汎神論を唱道した、宇宙萬有凡へて神である宇宙萬

有悉く唯一無限なる本体即ち神の現示である、凡そ本體となす得べきものは絶対的独立でなくてはならぬ毫も制限されぬものでなくてはならぬ此の絶対的無限のものが即ち宇宙萬有の本源である、物と心との如きは只此本體の屬性に過ぎないものであると、即ち氏はデカルト以來の難問題である物と心との二元論を一元に説明した。

ライブニッツクツ。氏は一面に於てはデカルトの二元論に反対し、又一面に於てはスピノーザの一元論に反対して單子説を成立した、即ち萬有の本體は決して一個又は二個から成つて居るもので無く神靈的活動を有する無数の原子より成つて居る、此原子は宇宙間如何なる所にも遍在して居るが独立して相互關係を有するものではない、此の原子の間には神の前定せる調和があつて相應し行くもので神はこの原始の單子であると。

ロック。人の心は白紙のやうなもので決して合理派の論者が唱へる

様な正邪善悪等の本然的觀念あるものではない知識は悉く経験から成るもので経験を外にして知識は無い、知識は必ず外識即ち外物の感覺を根本に完成したものであると、其論頗る精密を極めて居る。

以上を予は特に名づけて上代哲学史と云ひ以降を特に近代哲学史と命名する、
『而して以降近代哲学史は章を改め少しく詳細に紹介する計りである』

第五章 近代哲学

(一) 近世哲学の特徴

一 近世哲学に於ける哲学者、殊にカントの地位

ルネッサンスは有所意味に於て近世思想史の黎明であつた、ダンテ、ペトラルカに源を發した古希臘思想の復活は昏睡から醒め新しき何物かを索めんとする時代精神と投合して、人は茲に中世期の超自然的出世間的の迷想を捨て、再び自然と人間とに其研究の眼を放ち真正の理

法を究明し之に依つて真心の満足を求めんとするに到つた、ヒューム
ニストの自由研究の精神は文化の全分野に覚醒を促がした、コベルニ
クス、ケプラーの天文説は科学的宇宙観に一新紀元を劃した、此の時
運に醸成された哲学者は英のベーコン、ホツブス、佛のデカルト、独
のライブニツクであつた。更に佛のポルテール、モンテスキューの実
証論派、英のロック、ヒュームの経済論、感覺論を起した。
これとも、ルネッサンスは人知の実証的方面を解放し思索の対象とし
て自然と人間とを僧院から俗人の手に移したと云ふに過ぎなかつた、
造かに近代の自由にして現実的なる思索を喚ひ起したが哲学は未だ独
断的に非すんば懷疑的なる境地を脱し得なかつたのである、或は單な
る實在論に没頭し或は單なる知識論に専念し其の實在を論究するにも
演繹的乃至数学的に流れ其人知を究明するにも徒らに心理学的研究を
強調し遂に真正なる学理的法則を立つるに至らなかつたのである、之

等の弊を矯正し真に自由なる人智の解放をなし真に批判的なる哲学的
研究を完成したのはカントであつた。

ルネッサンス以後の歐洲哲学思潮の流れを見るに吾人は明かに二つの
潮流を著取する事が出来る、唯理學派と經驗學派とである。前者はデ
カルトに源流を發しライプニツク、ヴォルフ等の雄大なる純理學上の
哲學組織を打ち建てた幾多の哲學者を出したが概念を唯だ論理的に取
扱ふ事に依て吾人の一切の知識を形づくり得るか、如く考へ、即ち數
學上吾人の概念關係を確實に定め得るが如くに哲學上の知識をも亦概
念の相互關係として之を演繹的ニ論定せんとしたのである。けれども
唯た概念を分析し演繹的に論し行くだけでは知識の内容を何處に得ん
とするのであるか唯た形式のみで内容を失つて觀を呈してゐる即ち其
論究の過程でどうしても經驗上の心的内容を入れなければならぬので
ある、然るに一方に於て經驗學派はヒュームの如く自然界の普遍なる

学理的法則を立てる事が出来ず 因果律の如きも單なる心理的主觀的
習慣に過ぎずと云ふに至つた一つは智識の形式論にのみ備し一つは智
識の内容にのみ備し何れも哲学組織の全きを得ない矣に於て同じであ
る、從來の哲学が此の智識の二要素を分離して説いた矣に弊根を存し
た事を發見し之が調和融合を企て之に統一原理を與へんとしたのがカ
ント哲学であつた 茲に至つて綜合的批判的なる哲學的大組織が完成
されたのである。カントは此の論究の彙程に於て吾人の有する智識
の検査を試みたのである。吾人が哲学組織を構成するに至るに當つて
其構成に當るものは知識である、知識は果して哲學的攻究を遂ぐるに
可能であるかどうか、其可能を実証してからでなければ即ち不確定な
もので無い事を実証し論明してからでなければ哲學的思索に入る事は
出来ないのである、不確定なるものの上に不確定なるものによつて打
建てられたものは到底不確定なるを免かれないのである、知識が真に

確實にして哲學組織に可能であるかとか実証されなければ其の打ち建
てられた哲学組織も確實であるか否かが不明である、此の知識の確實
性を論明するため、カントは先づ知識の成り立ちを検査したのであ
る、ゾールフ学派は知識を確實なものとして知識の確實性を検査する
ことなしに直に實在の自性を窺ふに足るものだとして著しい独断に陥
つた、ヒューム其他の経験学派は吾人の知識の成り立ちを考へないで
は無かつたが直ちに實在の真相を窺ふに足らざるものとして唯た心理
学上の觀念に止めた矣に於て等しく独断的であつた、経験学派は知識
の起源乃至成り立ちを考究しなかつたでは無いが唯、経験上から吾人の
心理的発達順序を述べたまでにすぎずまた知識其のものの、成り立
ち更に進んで知識の可能を実証するに到らなかつたのである。カント
は斯くて知識の成り立ちを充分に考察しをして知識の可能を実証した
此のカントの知識に関する考究及び実證は吾人に知識の何者なるかを

極めて明確に指示して居る、此の智識に関する見解は後代の凡ての哲
学に影響し之を啓蒙した、吾人は依令、知識の可能性を確定されなく
とも知識に関する考究の道を真にカントに依つて開かれたのである少
くとも知識に関する省察方法をカントに依つて明瞭に教へられたので
ある、知識の考察は近代に於て最も燦然たる光輝を放つて發達し來つ
た自然科学の成立、その研究法に及んだのである。自然科学の確實性
可能性而して其限界は此新しき哲学に依つて論定されたのである。批
学を掩無せんかに見えた自然科学も依然として哲学の支配を受けなけ
ればならなかつた即ち自然科学を成立せしめたる知識の横敷は之に依
らなければならぬからであるカントの批判哲学中に於て最も異彩を
放つものは實に此の知識哲学である而して此の知識哲学は後代の哲学
を支配し後代の思潮に極めて重大なる影響を及ぼしたのである。
二、近世哲学思潮に於ける人間性の強調

三。

自然科学は自然を極めて現実に見る事を教へた人間は決して自然界か
ら特別にかけ離れた存在で無く、同じく自然界の一部であり、殊に最
近の進化論は人類も獸類の一種、其進化したものである事を教へた、
かくて人間を獸類と關聯せしめて見るやうになつた、カントは其論文
中に大に凡人主義を強調した、并は明らかに人間性の高唱であつた、
更にコントに至つては從來の道德宗教が人間性を離れた出世間的なも
のであり過ぎた事を嫌はずとし人間の宗教即ち人間教を以て新宗教新
道德となすに至つた、更に之を知識哲学方面に見ても實在の横敷に就
いての論議は人間の知力を以てしては不可能なりとし人間は知識を自
己の實用に必要な如く構成するにすぎずとなし知識は人間の所造で
あると力説するものを出すに至つたこは、ジエームス、シラー、ブラ
ットウエー、ドイツの唱ふるプラグマチズムである、更にシヨウペ
ンハウエルを見ても彼は人間中心の解脱説を唱へ世界は若の在界であ

三一

る、若を脱する事が哲学の使命であるとさえ説いて居る、更に近代文
藝思潮の主流をなした自然主義思潮を見れば其の骨子をなすものは全
く人間本位の科学的宇宙観、自然観、人生観であつた科学の威力は有
所、思潮の分野を征服した、科学の観る所に依れば人類は獸類の一種
目である、然るに従来の慣習道徳宗教は悉く此の臭を度外して成立し
て居る、宣しく獸類の一種としての人類なる事を自覚し其処から出立
して、ありゆる、思想組織を構成しかへなければならぬ、従来の因
習旧套は悉く打破されねばならぬ、さうしなければ眞の人間道は建
設され無い、科学は眞を見よと教へる、けれども吾人はこの眞を見て
居ない、故に眞の人間とは全く縁の遠い道徳や宗教が作られてゐるの
である、かゝるものは事物の眞に徹した人間には既に權威を失つて了
つた。吾等人間の道は人間本位の道でなければならぬ、従来の宗教
の説く神の道は吾人には縁がないを以て不可能である、如何に苦しく

、空に得なくとも新道以外に通るべき道は無いのである、仕方が
ないのである、かくて有所人間性を肯定したのである、此の自然主義
的思潮は遂に従来の實在論を訂正する新實在論を起した、ラッセル、
ペリーの徒が唱へる所のものである、彼等は其の思索の發程をプログ
マチズムに置いた、プラグマチズムは知識の考察を極に進めて終にカ
ント前期の知識論即ちヒュームの知識論と殆んど選ばざる境地にまで
達せしめた、實在は不可知である實在の認識は不可能である、唯だ吾
人は知識を吾人の實用に適する様に構成するだけであると言つて全く
現実的認識と相容れざるに至つた吾人は現実に物を見、物に觸れてあ
る、それを見ない、觸れ無いと言ふ事は出来ない、この不満から新に
なる實在論が起つたのである、けれどもそれは従来の實在説とは著し
く趣の異つた實在論である、極めて人間本位の實在論である。

更に現代思潮に見れば社会組織に関する考察が著しく眼立つて来た、

マルクス、エンゲルスに発程した社会主義思想は、社会学者、文藝家、
哲学者を動かしラッセルの如き哲学組織の中に極めて重大なる地位を
占むる社会主義に關する考察を加へた。けれども之等の思想は何れも科
学的であると稱し、人間本位であると主張し現實的認識に立脚して居
る事を力説してゐる。斯くて近代哲学思潮は科学の勃興^{はつ}に著しく影響
され哲学宗教を神の聖壇から人間の足元にまで引き卸したのである、
ルネッサンスは思想を神の手から人間の手に移した。けれどもカントニ
源流する第二の黎明思想は更に之を人間の脚下に卸した、マルクスは
「第二の曙」を説いて眞に棟宇なき社會の構成された時始めて其の曙
光を見る事が出来る^{と唱へたが}、吾人は吾人の第二の曙はカント、ト
ルストイ、イブセン、ジエームス、ラッセルに依つて徐々に開かれ来つ
た事を信したい。(以下次号)

カントの批判 哲學子

氏は一七二四年四月独逸ゲーニヒスベルヒの皮帶製造の貧家に生
れ一八〇四死す 彼は一生独身で終つた

氏の思想は三期に分れ、其論、幽遠高妙而も各面に及んで居るので要
を説くは頗る困難であるが左に此の大概を述べて見よう

カントの哲学は知識論である、カントは知識を形式と素材との二要素
に分拆した、而して素材は経験から與へられる後天的のものであり、
形式は吾人の心性其物に備つて居る即ち先天的のものであると説いた。
素材即ち経験に依つて與へらるるものは唯だ知識の枝となる感覺にす
ぎ無い知識は感覺だけでは成立し得ない、別に之に形式を與へ之を形
づくるものがなければならぬ 之を形づくるものは吾人の心性其も
の働きである、素材無き形式は全く架空のものであり又形式なき素
材は混沌^{こんとん}捉へ難きものである素材だけでは關係、秩序規程組織が無い、
關係秩序規則組織がなければ知識は成立しない、感覺に秩序を與へ之

を統一し之を組織して始めて知識が成立するのである、依て此の知識を統合成立するには次の十二範疇に據らなければならぬ、而して此十二範疇は先天的に皆吾人の本性に備つて居るものである。

分量 (1) 全稱断定 凡ての人は死すべきなり 全体
 (2) 特稱断定 或る人は死すべきなり 多性

(3) 單稱断定 楠正成は忠臣なり 一体

性質 (4) 肯定断定 人は死すべきものなり 実有
 (5) 否定断定 業感は滅すべき物に非ず 非有
 (6) 不定断定 靈魂は不滅なり 界限

(7) 合式断定 人は萬物の君なり 体性

關係 (8) 約結断定 雨降れば地濕ふべし 因果

(9) 離接断定 希臘又は羅馬は古代の主たる國民なり 相關

(10) 未決断定 動物も恐らくば理性を有すべし 可能不可能

様式 (11) 定説断定 人は理性を有す 存在、不在
 (12) 必然断定 生あるものは必ず死あり 必至、偶然

尚此の四種範疇より更にた、原理を發見し得る事が出来る

(1) 分量的範疇より見れば各現象は分量を有して居る即ち時間又は空間の量がある

(2) 性質的範疇より見れば各現象は一定の内容を有して居る

(3) 關係的範疇より見れば各現象は因果の法則に依つて結合して居る

(4) 様式的範疇より考ふれば時間、空間に由つて存する現象は必然的に

は非ずして時間、空間に關せずして存する現象は必然的である

此の四種原理は共に先天的に人間の本性より發するものであつて之に依つて吾人は先天的総合的普遍的なる断定を下す事が出来る、カントは吾人の知識は悉く現象に關するものであつて實體に關するものではない、それで心靈、宇宙、神等の眞實體は理想の最高標準であつて此の理性の其の理性は知る事の出来ぬものであると、斯くて彼は詳細な

る道徳論、審美論に説き及んでゐる。

シヨウペンハウエルの厭世哲学

アルツール、シヨウペンハウエルは一七八八年独逸ダンケヒ市に
生れ一八六〇年死す 彼の哲学はカントの影響を受くる事が多い、
彼の主張にかかる厭世哲学は浅薄皮層な知識と煩はしい生活とに悩ま
さるる近代人の胸奥に何等かの感銘を與へないで止まないものがあ
る而も解脱を説き「涅槃」を讚美する此哲学は寂滅じやくめつ爲樂ゐらくを説く佛教と
多くの類似点を有する事からして我々東洋人に更に多くの興味を感ぜ
しむる。シヨウペンハウエルは世界を現象と本体との両方面から見
る、我々の生活して居る此世界はゆずれも唯一の世界では無い 即ち
此の世界は假象世界であつて世界の本体は幽閑せられてゐるのである
然りは世界の本体とは何か、時間と空間とを超越した意志である、我

々に觀念さるる事物の状態は其意志の発現である、更に詳しく云へば
我々の感覺即ち眼に見え耳に聞えるままの世界は自分の表象である、
表象は人の眼を蔽ふ面纱の如く世界を其ままに見せるものでは無い、
従つて我々の感覺に現はれる世界は果して存在してゐるものが居ない
ものかを明かに云ふ事も出来ないのである カントは現象を経験的認
識の対象であるとするに對しシヨウペンハウエルは之を仮象と見て認
識を否定しこの世界は自ら單に欺罔ぎごうに過ぎないとす、象主義者であ
る即ち世界の本体は意志であると説くのである。此の世界のあらゆる
現象は此生活意志の發揮であつて理想とか希望とか云ふものは此盲
目的非理性的な意志の前には何にもならないのである惡に身を亡す理
女、生殖の爲めに生命を堵とする虫類の如きも矢張り生命維持の本能、
生活意思の發揚であつて即ち自らの個体を犠牲にしても其種属の生策
を維持せんとするのである。然しなかり此意志が来むれば未むる程

不満足は増して来る 不満足を増して来れば来る程又未^四むる事を増すのである、勝利の次に勝利を望み、成功に次に更に他の成功を欲する、かくて大なる不満と欠乏とを満さんとして意志は絶へざる努力をつづける、此絶へざる努力は即、絶へざる苦痛である、殊に人間には智慧と云ふものがあるので無意識に努力して絶へざる不満、苦痛を追ふ以外に此智慧のために更により多くの不満足を感じ従つて其苦痛は益々甚しくなるのである。

此の苦痛は聽て厭世觀となり、厭世觀は聽て其苦痛を脱する方法である。解脱法に説き及ぶのである、解脱の道は如何と云へば即ち意志を否定し凡べての欲望を絶つて此無意の境に入るのである 例へば耽美的恍惚境に入つて絶へざる煩惱苦痛の境を脱する、即ち絵畫風景、詩文、音楽等に恍惚として我を忘れるが如きも亦一種の解脱である 然し耽美的恍惚境は一時的であつて再び已に帰れば又旧の苦痛の世界

に帰りなければならぬ従つて永遠の解脱に入るには道德的生活に入つて已を否定し已を忘る、事を要する、即ち利己心から離れて他人の憂を共に分ち苦痛に同情して慈悲の眼で一切衆生を見なければならぬ更に進んでは此世の觀樂に依りの樂である事を悟り名利は空しく富貴は浮雲の如しと大悟し嚴格なる禁欲主義を守つて生活意志を根柢から絶滅し心身共に枯死せるが如き状態に入るのである。此境涯が仏教で云ふ涅槃である。

ニイキエの超人哲學子

フリードリッヒ、ニイキエは一八四四年十月十五日 独逸サクソニ一のレッケン^{レクセン}の町に生れ一九〇〇死す彼の後半生は強度の神經衰弱と孤独の寂寥のために衰むべき生活であつたが彼の勇ましい超人哲學は此中に建設されたものである

予は先づ彼が超人の哲学に就いて説明を加へる前に彼の永遠輪廻説を
一通り述べて置く必要を感じる。彼の永遠輪廻の説とは、此世界の
のあらゆる現象は永遠に輪廻し再現すると云ふ思想である、宇宙を構
成する力の総和と云ふものは一定不変のものである、其力の元素が結
び合ひ、或は相衝突していろ／＼の現象は起るものである、然らば無
限の時間の間には同じ様な現象が必然的に同じ様な仕方で繰返し起さ
れなければならぬ人間の生命に於ても亦そうである人は恰も砂時計
の砂の如く一度漏斗じょうの口からこぼれた砂はそのままに返されて間断
なく同じ事を繰返すのである人生には何も新しい事は起り得ない今送
つて居る生活を永遠に反覆するに過ぎないのであるだから人間は其死
の瞬時に於て「之が人生であつたか、よし再ひ」と希ふ様な意義ある
生甲斐ある生活を営まなければならぬ、人生は永遠に繰返され永遠
に運命づけられるのであると云ふのがエーケエの永遠輪廻の思想であ

るだからエーケエは宗教家の唱ふるが如き天国も地獄も認めない此
世で忍従惨苦の生を送つて神の心に適へば死後は天国に行くものであ
るとするのは基督教の力説する所であるがエーケエに依れば人生の再
現に於ても矢張り同じ様な忍従惨苦に甘じなければならぬ此世で苦
しんだものは二度も三度も其苦しみを繰返さるのであつて其処には
天国も無ければ地獄も無いと説くのである、「生き甲斐のある生活を送
る」是が永遠輪廻の説の根本である此思想からして彼の超人哲学は生
れたのである。

超人とは人間を超越したものの意である、人間が猿より優つて居る如
く超人は人間より更に優つたものである、進化論によれば人間は初め
から今日見るが如き形体を具へて居るものでは無かつた下等動物から
漸次進化して行つて結局猿から進化したものであると説くのである
従つて人間は全動物の最高に位するもので今、人間以上のものは

無いのである。然らば人間に於て動物の進化は行き結つたかと云ふと
 必ずしもさうと断じられない人間も亦進化の途中にあるものであつて
 より良き人間を完成する過程にあるものと見なければならぬ其良き
 人間こそ即ち超人である。ニイチエはツアラストラと云ふ人物
 を捉へ來つて其言行に彼の理想を仮託して超人の哲学を説いて居る。
 「汝等は虫から進んだのだ汝等の中の多くは猶、虫である、汝等は嘗て
 猿であつた、聴け我は汝等に超人を教へやう」
 ツアラストラは高い山上の洞窟へ、民主制の誤解と迫害との下に惱
 んだ高級の人々を集めて超人の道徳を説いて居た。彼の教ふる所は肉
 体と本能とを重んずるにある。そして精神のみを重んずるにある、
 そして精神のみを重んじて本能を蔑にする従来ばくけきの宗教を駁撃して居る、
 彼によれば自然は一切無価値である、之に価値を與へるものが人であ
 る、例へば草は鹿には尊い食物であるから価値があるが獅子や人間

には何の役に立たない即ち無価値である。かやうに動物に価値ありとて
 人間にも価値ありとは云へない従つて或人の善は他の人の善でない或
 る国民の善は又他の国民の善ではない或る時代の善は他の時代の善で
 はない即ち善悪や真偽は一定不変のものでは無い。然るに宗教は依然
 として古い価値表に準據してゐる。之は人間の進化を妨げるもの
 であると説くのである。

超人の哲学は要するに強者の哲学である、意志の哲学である、先づ超
 人たらしんとするものは須らく力強くありねばならぬ意思を鞏固に持た
 ねばならぬ、そして愛とが憫れあはれみとか云ふ感情を心の底から棄て去らな
 ければならない。さうしなければ超人に應こたじない。価値表を造る事は出来
 無い、もし弱い者が倒れかかつてゐるなら押倒してやれ、亡びかかっ
 て居るものは亡びさせよ、唯強者と善者とのみが超人を生み出すもの
 である、冷酷、それが人間の採るべき道だ、冷酷を愛する事は畢竟超人

を愛するからだ、凡べてのものに對して冷酷なれ、自分自身に對しても冷
酷なれ、基督は、それ自らが説いた愛のために倒れたては無いか、つま
り労苦は偉大の源である、斯う、ニイチエは豪語して居る、そして人
生は常に自身を超越するもので無ければなりぬ、超越の一面は他を征服
する事である、征服は戦である、従つて超人の道德は戦の道德となるの
である、ツアラツストラは戦を讚美して戦のみがトク人間に進歩を
もたらす戦のみが良く人間を超人にまで近づかしめる戦へ、戦へ、と説い
て居る。

ツアラツストラは大なる群集の人々に人生の諸々の状況を教へるた
めに下つて行く、そして民主的標準を憎悪する事に勝利を得る、もし
て超人の出現の大なる希望を教へる、之は新しき價値表を作り上げる
事に依つて出来得べきものである、そして彼は永遠輪廻の教を説く、
「汝等は凡てが猶再び起るを欲するか」の問に對して凡てが然りと

答へるのである

コムトの實証哲学

オウギユスト、コムトは一七九八年南仏蘭西モンペリール町に生
る。社會学の鼻祖

實証哲学とは之を簡單に云へば科学的哲学である、形而上学に對する
反動として起つたもので自然科学が宇宙一切の現象を説明しやうと企
てて哲学の領域を侵したものである、コムトに依れば哲学とは昔の人が
云つたやうに人間思想の全体の意である、實証的とは任意の觀念の組
み合せ中に於て事實を整列する事が凡ての學說の目的であると云つてゐる。
である即ち實証哲学とは事實に基いた知識の全体であると云つてゐる。
コムトの根本の考はつまり實と利と云ふ事である、實と云ふものは實際
に證明し得らるるもの、意で利とは實際上の効果を生じ得べきもので

四八
ある 即ち神学の如き実もなく利も無きものは最早價値なしとし最も
實にして利あるものは社会学であると唱へてゐる 実証主義の根柢で
ある実と利と云ふ事については種々議論がある、單に實と云つても凡
ての学問が同等に實であると云ふ事は出来ない、物理学は実証的学問
であると言ふけれども原子とか分子とか電子とか云ふ事は畢竟一種の
仮定であつて神とか本体とか云ふ事と擇ぶ所はない 又利と云ふ實に
於てもさうである 要するに科学的であり事實を導ぶと云ふ事が 実
証主義の根本とするところであるが、然し事實と云ふものが曖昧であ
り科学的と云ふ事も正確でない以上実証的と云ふ事も結局あいまいに
なる訣で此臭が不徹底として一般の非難を買ふ所以である

スペンサーの不可知論

ヘルバルト、スペンサーは一八二〇年英國のデルビーに生る

進化哲学の創設者

スペンサーは云ふ。数学に於て一とか十とか乃至、百、千と云ふ如き
概念は比較的判然として即ち完全であるが、然し億、兆、京キョウと云ふやう
な巨大な数になると其概念は漠然として極めて不完全である 結局一
種の符合に過ぎないことになるのである 斯く如く或る概念の屬性が
判然と意識内に現れる場合は其概念は完全であるが之に反して意識内
に現れ得ない時は其概念は不完全である、例へば石とか木とか云ふ概
念は完全であるが神とか宇宙とか、云ふ概念は極めて不明瞭である即
ち斯う云ふ概念は一種の符合に過ぎないのであつてそれについて如何
説を立つるも結局不可知な事である物質運命や意識等の事も結局知る
べからざる事で宗教、科学の究竟の事は所詮不可知である知識と云ふ
ものは相対的のもので絶対的の問題は分らない、即ち哲学も科学も不
可知と云ふ事が其根柢であると云ふのが其主張である

マルクスの唯物史観

一八一八年独逸トリエルの町に生れ一八八三年英國にて死す

彼の談博な思想を通観すれば其の本領は大凡次の三臭に締約せられる
即ち (一)唯物史観説 (二)階級闘争説 (三)剰余價值説である

(一)唯物史観説……マルクス哲学の根柢をなす説で思想上の混乱を避くる爲めに唯物史観は社会進化発達に関する学説であつて社会進化の説明以外に出でんとするものではない従つて宇宙萬有の起源や其の終局や其の存在理由等の問題を取扱ふものでもない即ち社会は永久に變化發展して息まな^やいものであるが其の進化發展を可能ならしむる重要な要因は思想や哲学や政治や宗教の様な精神上のものではなく經濟上の環境である經濟と云つても狹義でなく広く解せられて居る即ち富の生産分配交換上の方法や總て人種氣候地理的關係地味・良否等を含め

て居る社会上の制度及社会關係は綜合して經濟上の環境を構成して居ると見て居る此の經濟の環境の上に一切の文化が花として咲いて居るに過ぎない併し茲に新しき生産の力が起り其の經濟の環境に變動が生ずれば一切の社会關係も變化し其の社会關係に適合した主義思想政治法律哲学宗教等が生れるのである丁度新らしき武器の發明に依つて矢制や戰術上に大改革が行はると同様である要するに(二)一般社会進化即政治的制度思想上の問題(三)階級闘争(四)各階級に於ける思想上の問題等は經濟關係を離れては理解は出来ないけれども經濟關係が社会發展に於ける要因ではない(五)歴史を解釈せんとするには經濟上の關係からのみでは説かれなければならないけれども經濟上の諸現象を理解する最も有力なる鍵鑰である事は疑なき事實である

(二)階級闘争説……唯物史観説の主要部分であつて社会組織の大變革が經濟的動力の推進の下に如何なる方法に依つて行はるかを説明せ

るものである即ち社会組織の隠れたる基礎が経済上の關係に存して居る故に富……賤物を生産する人と生産に要する条件とが必然に起つて来る是れが資本家階級と労働者階級とを構成せしむる所以である而して資本家は富（賤物物品）を生産するには必ず労働者に待たねばならぬ而して資本家は物品の賤賂に於て他との自由競走で得んとするものである其れには生産費用を少なくして出来るだけ多くの物品を得る事が必要である其の爲に資本家は飽^{あくまで}逆も労働能力を出来るだけ有効に用ひんとして出来るだけ労働者を苦しめ以て生産を増加して行く事を謀るものである茲に於て労働者階級の反抗となり闘争が起るのである此の資本階級対労働者階級ブルジョア対プロレタリアの争闘は必然的なもので又盡きる時がない歴史は此の階級争闘の歴史であつて今日の近の政治宗教は資本家階級を壓迫せん爲の手段であつて多数民衆は少数の資本家に依つて束縛され抑壓されて来たのであると

(三) 剰余價值説………之れは資本家が生産手段を管理する結果労働者に支払はざる不当の富を掠奪する有様を説明せる原理である労働者は多く働いて少しの報酬しか受けない労働者の與へる労力の價值は後くる報酬より遙かに高い故に報酬を差引ひても尚ほ労力には剰余の價值があるのである資本家は不法にも此の剰余價值を独りして巨萬の富を蓄積する而して此の剰余價值は資本家所得の源泉であつて資本主義経済組織の軸をなすものである故に資本家は剰余價值を益々大ならしめんとし労働者は之れを減少せんとするのであると併しマルクスは資本家が剰余價值を所得の源とする事實に対しては少しも批判を加へてない又労働者は自己の産出した物の全部を所有するが正当であるとする議論もない様である此の真はマルクス主義の薄弱なる事を示すものである。

トルストイの人道主義

五四

レヲ、ニコライウイツ、トルストイは一八二八年中央露西亞の名門に生る

人道主義とはすべし、所謂宗教的な事を排して飽く迄も世間的な人間的なる事を中心とする思想信仰行為等を指すのである彼は人生の目的は善にあると見た其の善は具體的のものであつて此の人生をより善く改善すると云ふ事であつた宗教科學藝術其の他一切の思索も考察も此目的を離れては何の價値もないと唱破した此の奥から見れば彼は正しく實用主義者である而して此の目的に完全に到達するには愛に依る外は無いと見た。愛とは何ぞや理性の発動である理性は萬人共有のもので是を神とした之れが彼の中心思想である而して彼は善、理性、愛、神等に就いては次の様に説明を加へてゐる

(一) 善……幸福……人生の目的は善へ幸福にある位は何人も知つて

あるがさて此の善を求むるに當つて人は先づ自己を中心として幸福を求めず、然しただ個人的幸福のみを追求すると必ず他人と衝突して遂に不幸を齎す故に個人的幸福は眞の幸福ではない眞の幸福は個人的幸福以外の處にある即ち釈迦は「人生は幸福なる涅槃ねはんに到達せん爲めの自我脱却である」と云ふて居る基督は「人生は人に幸福を與ふる神と隣人とに対する愛である」と啓示して居るトルストイの説く處も亦之れに過ぎないのである。たゞ異なる處は其の幸福を墓の彼方……未來の約束とせず飽く迄も現實を重んじ福祉をば現世に齎もたらすものでなければならぬと主張する矣であるかくして彼は仏教の自我脱却を理想としたが涅槃と云ふ文字に不満を感じた又基督教の現世よりも未來に重きを置く教義に対しては激しく非難の矢を放つた而して次の如く云つてゐる「墓の彼方の生活のみが眞の生活で合理的なものだとか個人的生活のみが幸福で合理的なものだ」と云ふ様な事は自分はいれだけ信じ

五五

ようと思ひまた他人から信じさせようと思はれても信ずる事は出来ない
 人は其の魂の奥底に彼の生活は幸福で合理的な意味を有つであらうと
 の消し難い要求を持つてゐる併し其の前途に墓のあなたの生活や不可
 能な個人的幸福を置いてゐる生活は害悪で無意味である彼は斯様独語
 する併し此の生活を私の知つてゐる唯一の標本たる此の生活を……
 私の現在の生活を……不合理なものだと云ふならば私には此の外に
 合理的な生活があらうとは思へない許りでなく其の反対に人生と云ふ
 ものは本質的に不合理なもので其の不合理な生活より外に何も有り得
 ないと云ふ事を信ずるより外に仕方がない、私自身の爲めに生きる？、
 けれども私の個人的生活は害悪であり無意味である私の家族の爲めに
 生きる？、私の社会の爲めに生きる？、國家の爲めに？、しかし若し
 私の個人的生活がみじめなものであり無意味なものであるならばあり
 ゆる他人の生活もみじめで無意味である従つて其の無意味な人々を無

限に多く集めて見ても唯一人の幸福な合理的な生活を作り出す事さへ
 出来ない！とこれは彼の心からの言葉である而して合理的な生活は宇宙
 の大法なる理性に順ふ生活で人間の最高善の生活であり無上宝珠の生
 活であると強調する矣は人生に対する彼の根本的態度である
 (二) 理性……彼の用ふる理性とは人間生活を統禦すべく神から授けら
 れたる最高法則の事である自己が宇宙に通ずる唯一の活路である萬人
 生れながら等しく有つてゐるもので全宇宙を貫く大法の儼存を認知す
 る機関である萬物は理性の中に生存して居る而して理性は絶対的根本
 的存在であるから外物に依つて規定され説明さるべき性質のもので
 はない

(三) 愛……理性の活動である普通人間に運命付けられた愛は一方に「憎」
 みなくしては成立し得ぬ自我的個人的の愛である吾々に最も大切な母
 親でさい自分の悪人と共に愛し得ざる偏狭な愛があるかくの如き愛は

他方に害を與へなければ止まない。まことに不合理な愛である然らば如何にせば合理的なしかも現在に生くべき愛を得る事が出来るか、動物的生活を棄てる事によつて得られるのである自己犠牲に依つて得られるのである彼曰く「動物的人格は幸福を求め、理性は個人的幸福の虚忘を證明し唯一の道を残す。この道に従つた活動が愛である」とかくして彼は無抵抗主義を主張した更に積極的に「神を愛せよ汝自身（あなた）の如く汝の隣人を愛せよ」と叫んだ此の自己犠牲性によつて贖（あがな）はれた愛、理性の愛こそ幸福の源泉である。

四神……彼は理性を神と見た、彼の神は天国の玉座から下界を見下して居る神でなく亦最終の日、審判を司り未來の幸福を保證する神でもない宇宙に遍満する無限の大生命にして而も現実の吾等の内に理性として啓示せる神現実の生活に活躍して幸福を與ふる神……之を彼は神と認められた従つて彼の宗教に関する見解は次の如くである「眞の宗教は神と認められた従つて彼の宗教に関する見解は次の如くである」

教は人が彼を取り圍んである無限の生命に向つて定むる一つの關係、（理性及び智識に適合する）であつて彼の生命を其の無限に結び付け彼の行爲を指導するものであると尚彼の説は藝術觀にも及んでゐる即ち彼は「藝術の爲めの藝術」と云ふ事を排斥して人生の爲めの藝術を主張した

タゴールの再生哲學

一八六〇年印度カルカッタの名門の子として生る大哲學者にして詩人彼の思想を大觀すれば最初に梵（神）が儼然として立つてゐるそれに對立して梵から分離した個我（自我）がある此の自我と梵とは絶へず合一として翹望してゐる此の兩者の合一せんとする奴力其ものこそ生活の凡てである然らば如何にせば自我が梵と一如（いちに）になる事が出来るか其れには外面に走る心を止めて自我の内に向け自我の眞性を知る事だ

ある眞実なりざる自己を捨てなければならぬ茲に於て彼れは個我の解放自我の犠牲を説くのであるかくして我々は梵の世界に眞参する事が出来るこゝに再生の人後活の人としての個我が生れる此の個我を提げて吾々は花の苞に出なければならぬそこに眞実なる生の歡喜があり愛の生活があるこれが彼の哲学の究竟であるそこで我は彼の思想を(一)梵の觀念(二)個我の問題(三)再生の法とに分けて述べる事とする。(一)梵の觀念……タゴールの哲学の基礎は前述の如くウバニシヤットの梵我一如觀に立つものである。即ち宇宙原理の梵と個我生活の本質をなす自我とは本性に於て同一であるとの見方である二三の例を挙げれば「この我は實は彼の梵なり」(グリハドアーランヤカウバニシヤット)「我は梵なり」(同上)「汝は彼なり」(キヤーントーギヤウバニシヤット)此の中殊に後の二句は二大格語として数千年間印度思想を支配した標

モツ

語である梵は宇宙的の意識であつて萬有の母である萬有の生命も光明も彼の中にある彼の精神は萬有を感じ萬有を意識するものである我達の肉體も精神も彼の意識の中に潜んでゐる太陽が地球を引きつける事も彼の意識を通してある光りの波が太陽から遊星へ遊星から遊星へと傳達する、のも彼の意識を透して可能なるのである彼は宇宙に遍満する實在であつて広がりの世界にも内包の心界にも住家を有してゐる梵は永遠なる實在であつて時間を超越してゐるが瞬間中に働くものである彼は絶対完全な存在であるが常に不完全の中に相を現じ創造して止まないものである以上は實在としての神(梵)觀であるがタゴールは又梵を價值として認める梵は完全なる無言の理想であつて彼は愛であり眞理であり歡喜であり美であり善である要するに彼の梵觀を一括すれば梵は萬物創造の神であり全知にして周遍法界に満てる存在である超絶的で同時に内在的な神である眞善美を具現せる神である斯様

に彼は見てゐる様である。而して我々の自我の本性は此の梵から元來分れたものであるから再び梵に歸する事が出来るものである即ち「再び」は捨つる事によつて得可し爾貪る勿れ」と自我の囚れから脱れる時神と一つになる事が出来るけれど神を左右する事は出来ないこれは一面から見れば窮極な様である宿命論的の様である併し船が大洋の中において動き大洋其自身と共に泛ぶと云ふ事は一つの宿命であるが他面から見れば船が大洋によりて動き又泛べられる事を想へば大洋の束縛こそ絶対的自由と生命とを與ふものであると見る事が出来る故に私達は神によつてのみ生き神によつてのみ生活が深められぬれ創造され得るものである事を知らば私達は神に歸命信順する處に絶対的自由と生命とを得るを感ずるのである彼は相對するものは相一致すべきを見た、物を二元的に分けなかつた善悪の問題としても二元的には見てゐない悪は不完全なる善であつて茲に創造の生活がある此の創造によつて善と

悪とは最後に一致すべきを悟つた例へば悪は河の岸の如きものである岸は流れを堰くが其れによつて川は流れる事が出来る人生の悪は人をして水の流るゝが如く善に赴かしめる爲めに存在するのである包容的一元的な此の見方は印度思想の特徴である

(二) 個我の問題……タゴールは一方に宇宙原理の梵を尊重すると共に特種的な個性の尊嚴をも認めらるる「我は絶対独尊である我は我である我は唯一無二である宇宙の全量を以てしても我が個性を粉碎する事は出来ないそれは外貌に於ては弱小に見えても事實に於てあらゆる力と抵抗し得る程偉大である」と彼は説いてゐるだが無條件に自我を肯定する者ではない梵に根ざすものとして尊嚴を求めらるのである併し此の個性の本性に覺醒せず物慾や蒙昧にのみ生くる自己、囚はれたる自己、小なる我をば飽までも否定するウバニシヤットは曰く「爾自身を蒙昧より自由に置け爾の眞の灵性を知り而して爾を牢獄に置く自我の

枷より救はれよ」と然らば此の個我が如何にして生れて来たかの、
 バニシヤットは曰く「喜びから凡てのものは創造され喜びによって支
 へられ喜びの方へ彼等は進み喜びの中へ彼等は入る」と喜びは愛の別名
 である萬有は神の法悦の喜びと神の無限の愛から生れた丁度神輿に馳
 れた詩人が其れを言葉に現はす様に喜び溢れた神が其の喜びに形を與
 へて神の「別自我」として個我が生れた形は制限であり法則である萬
 物は法則を持つてゐる吾々は法則を知らなければならぬ同時に法則を
 超越し支配してゐる神を知らなければならぬ自然はすべてからした二
 面を有つてゐる一は必然の法則に縛らるゝ奴隸状態である他は喜びの
 中に動く自由状態である外面から自然を眺むれば束縛の世界であるが
 内面に立入つて見ればそこに自由の天地がある萬有は斯く神の愛から
 生れたこの生れた個我を元の神の御胸へかへす事は人生の目的である
 法則から自由へ道德界から愛の世界へ此の個性を導き進める事は人生

終極の目的なものである然らば如何にして其れを完成する事が出来るか
 其は次に答ふるところである

(三)再生の法……印度では再生とは鳥を意味する鳥は卵として生れ雛
 として卵から孵化する即ち二つの誕生を有つてゐる處から此の名が付
 けられたのである卵の滑らかな殻をおしんで若し其れを自ら破らな
 ったならば何うして雛は自由な世界に出る事が出来よういぞ何うして
 成長する事が出来よういぞ卵の殻は美しいけれども破らなければなら
 ぬおしんではならぬ丁度吾々の生活も其の通りである一切煩惱の生活
 は生れ乍ら吾々に親しみ深いものである快樂を與へるものである美麗
 な樂土である到底捨て難き生活であるけれども是れは囚はれた生活で
 ある以上は幣履の如く捨て去らなければならぬ而して眞実の自己に開
 眼して梵の世界に入らなければならぬ茲に樹下石上の軟尊の惱みと喜
 びとがある基督の眩野の徘徊がある此の両聖にとつては假我を捨つる

若しみは大我に向つて踊躍して進む歡喜に比すればあまりに小さかつた恰も曉に燈火を喜んで消す様に吾々は此の小我を棄つるに喜びを以てせなければならぬ喜んで自己を犠牲にせなければならぬ此の喜びは解放の喜びであり愛の喜びである爰は地中に自己を棄つる事によつて青々とはえる自我を棄てる事は眞の自我に生くる事である人は現実に甘んじてゐてはならぬ若し人が永久に現実に^{だきよう}妥協して果なき夢を喜んでゐるならば、みじめなものである理想に至らんとする處に自由と無限とが開けるのである即ち我等は速に仮我を去つて梵の世界に直参し溢るるが如き愛に浴せなければならぬ小児は慈母の愛によつて育つ如く梵の子である吾等が梵の愛によつてのみ眞に生きる事が出来るのであるがくして吾々は梵の愛と自由と無限とを分有し再生の人復活の人たる事が出来るのである而して歡喜と光明との中に於て生々した活動に満ちた生活を営む事が出来るのであると。

(本篇終り)

大正十四年四月十三日印刷
大正十四年四月十八日発行

編輯兼 東京市牛込区谷台町十六
發行所 大學林講習部

代表 平原暉明

印刷者 東京市牛込区谷台町十六

盛岡鶴松

發行所 東京市牛込区谷台町十六
大學林講習部

284
341

★
五

終